S. Ashina

＊自然神学の社会科学への拡張
１．自然神学とその歴史的展開
２．自然神学の拡張と科学論
２－１：聖書の社会教説　　２－２：聖書の経済・環境思想
２－３：聖書の政治思想　12/8
２－４：自然神学から社会科学へ　12/22
２－５：キリスト教思想と科学技術　1/5
２－６：キリスト教思想と生命　1/12
２－７：キリスト教思想と脳科学　1/19

＜前回＞聖書の社会教説
（１）自然神学の拡張と聖書
１．自然神学全般のモデルとしての狭義の自然神学
聖書の創造論と自然学（形而上学）との共通の場としての「宇宙」（自然／歴史）
狭義の自然神学：キリスト教と古代地中海世界の知的環境との接点を構成する。
宇宙論的な諸宗教における共通の地平、それに基づくコミュニケーション
自然学的な観点から見た聖書の創造物語の意義（近代以降の科学との対立の要因ともなる）。
２．しかし、現代（知の多元性）においては、自然神学の社会科学の問題領域への拡張、つまり、別の意味の地平への移行が必要である。古代地中海世界の知的世界の相対化。社会教説という問題設定。
３．トレルチ『社会教説』
社会教説とは。教会、分派、神秘主義の三類型。自然法。経済、政治、家族。
Ernst Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*, 1912（*Gesammelte Schriften* 1. Scientia Verlag）
『古代キリスト教の社会教説』（髙野晃兆・帆苅猛訳）教文館。
「はじめから、キリスト教のすべての社会教説は同時に国家と社会についての教説でもあった。その際にキリスト教の人格的なるものから出発する思考形式にとって家族は同時に国家と社会の前提であり、それ故キリスト教の社会教説に属している。宗教的な共同体理論にとって家族、国家並びに経済社会は密接に結びつけられた社会学的形成物として現れることによって、今やけれども再び《社会的なもの》の概念が拡大されるのである」(28)
５．理念：福音（説教）・神の国　→　社会学的図式：絶対的な個人主義と普遍主義
→　＜歴史的状況＞　社会的なものの形成：家族、経済、国家
キリスト教の社会的三類型：教会、分派、神秘主義
愛の共産主義

（２）家族
１．家族と民族との同型性
家族的血縁関係として表象されたイスラエル共同体（古代イスラエル民族起源神話）
↓　cf. 契約との関係
家族としての教会
初期キリスト教における共同体原型としての「家の教会」の存在
２．エフェソ 2.14-22
３．民族とは、血縁的つながりの延長上に自然に成立するものではなく、物語（民族起

源神話）を介して、共同体的な構想力の作用に支えられてはじめて形成される。
４．民族を構成する構想力の素材としての「家族」「家」
６．家族のメタファー化。イエスの宗教運動の家族論。
家族論の歴史性：創世記の創造物語における家族の描写（創世記2.24）と西欧近代の一夫一婦制の類比
「2:24　こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」
→　古代の地中海世界およびイスラエルの家族制度
家族関係における縦軸（世代）と横軸
８．「最終的に最後のアフォリズムにおいて、イエスの家族に対する攻撃の論点はきわめて明瞭になっている。５人のメンバーからなる標準的な地中海的家族、つまり母と父、妻をもった既婚の息子と未婚の娘という拡大核家族全員が一つ屋根の下で生活していることを想像いただきたい。イエスは、自分はこの家族を引き裂くと述べているので ある。……この攻撃は信仰に関わっているのではなく、権力に関わっている。攻撃は父母を息子、娘、嫁の上に置く地中海的家族の権力軸に加えられているのである。」(Crossan,1994, pp.59-60)
９．「家族」の意味転換プロセス＝「家族のメタファー化」、「批判（否定）→転換→拡張（肯定）」という意味転換プロセス。
家族についての新しい理解の生成、「血の絆」という自然的関係性から「神のみこころ」という精神的関係性への意味のメタフォリカルな移行
↓
「神の国」とは「神の家族」である。
10. イエスの家族批判と家族の意味転換
個人の抑圧装置としての「家」（古代地中海的大家族の現実）
血縁関係への過度の信頼がもたらしたもの
血縁関係の昇華（精神化・霊化）＝意味の転換（解体と再統合）
血縁的集団から、精神的絆へ、共通の価値（キリスト教では「神の戒め」）へのコミットメント（信仰）による家族の再生
11. 家族のメタファー化の意義
生物学的血縁的家族の限界を超える可能性
現実の家族を相対化し、そして再生する。
・血縁関係のない家族？
・超高齢化社会における人間的絆
12. 家族と公共性：家族は身内びいき（家族エゴイズム）を越えられるか
共通の価値の広がり、下からの共通価値の構築

２．自然神学の拡張と科学論

２ ― ２ ：聖書の経済・環境思想

（１）宗教と経済、問いの所在

１．宗教と経済は、宗教思想にとって、いわば隠れた問いである。「欲望」という問題。
・近代キリスト教思想の前提→宗教の内面化・精神化＝私事化
聖と俗の二分法：宗教と経済を分離する暗黙の思考法
本来の宗教、キリスト教は、御利益宗教ではない。魂・心情の純粋さが宗教の真髄である。
しかし、献金とは、経済的な側面を有さないのか、聖職者は、実質的に職業化して

いるのではないか。建前論を超えられない、宗教の抽象的な議論。
・現実の宗教を批判的に分析する際に、この二分法には、限界がある。
↓
経済・富・欲望は、キリスト教にとって、常に隠れた争点として存在した。
この経済と宗教とのリンクにこそ、宗教の根本的問いがある。
聖書の富者批判、愛の共産制、修道制の成立と展開、宗教改革、土着化など
まず、ここに問題の核心が存在することを認めるところから出発するとどうなるか。

（２）聖書の宗教と経済との多様な関連性

２．聖書から特定の政治システムを一義的に導出することはできない。経済・富の問題も同様である。
富者批判という基調と祝福としての富理解まで。
↓
キリスト教思想は富に対して、いかなる理論を構築できるか？

３．富者批判：
(1) 預言者の富者批判・弱者の視点、正義＝神の下の平等
「災いだ、偽りの判決を下す者、労苦を追わせる宣告文を記す者は。彼らは弱い者の訴えを退け、わたしの民の貧しい者から権利を奪い、やもめを餌食とし、みなしごを略奪する。」（イザヤ 10.1-2）
(2) 黙示文学：富める者の不正はこの世界の悪の支配の徴。神の国ではこの秩序は逆転。
「わざわいなるかな、きみたち富める者。きみたちは、自分の富を頼みとした。しかし、きみたちは、自分の富を失うであろう」（エチオピア語エノク 94.8）
(3) イエスの富者批判。
「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」
「しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である。あなたがたはもう慰めを受けている。」（ルカ 6:20-25）
(4) マリアの讃歌。
「思い上がる者を打ち散らし／権力ある者をその座から引き下ろし／富める者を空腹のまま追い返されます」、「身分の低い者を高く上げ／飢えた人を良いもので満たし」（ルカ 1:47-55）
(5) 初期キリスト教会と愛の共産主義（財産の共有）。
「信じた人々の群は心も思いも一つにして、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべて共有していた。」（使徒言行録 4:32）

４．物質的な豊かさは神の祝福。→　因果応報と核とする慣習的共同体的な知恵！
(1)「主がわたしの主人を大層祝福され、羊や牛の群れ、金銀、男女の奴隷、らくだやろばなどをお与えになったので、主人は裕福になりました。」（創世記 24.35）
(2)「もし、あなたがあなたの神、主の御声によく聞き従い、今日わたしが命じる戒めをことごとく忠実に守るならば、あなたの神、主は、あなたを地上のあらゆる国民にはるかにまさったものとしてくださる。あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うならば、これらの祝福はすべてあなたに臨み、実現するであろう。あなたは町にいても祝福され、野にいても祝福される。あなたの身から生まれる子も土地の実りも、家畜の産むもの、すなわち牛の子や羊の子も祝福され、籠もこね鉢も祝福される。あなたは入るときも祝福され、

出て行くときも祝福される。主は、あなたに立ち向かう敵を目の前で撃ち破られる。敵は一つの道から攻めて来るが、あなたの前に敗れて七つの道に逃げ去る。主は、あなたのために、あなたの穀倉に対しても、あなたの手の働きすべてに対しても祝福を定められ、あなたの神、主が与えられる土地であなたを祝福される。」（申命記 28.1-8）

(3)「主はその後のヨブを以前にも増して祝福された。ヨブは、羊一万四千匹、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭を持つことになった。彼はまた七人の息子と三人の娘をもうけ、長女をエミマ、次女をケツィア、三女をケレン・プクと名付けた。ヨブの娘たちのように美しい娘は国中どこにもいなかった。彼女らもその兄弟と共に父の財産　の分け前を受けた。ヨブはその後百四十年生き、子、孫、四代の先まで見ることができ　た。ヨブは長寿を保ち、老いて死んだ。」（ヨブ 42.12-17）

(4)「主を畏れて身を低くすれば／富も名誉も命も従って来る。」（箴言 22.4）

(5)「神から富や財宝をいただいた人は皆、それを享受し、自らの分をわきまえ、その労苦の結果を楽しむように定められている。これは神の賜物なのだ。」（コヘレト 5.18）

５．聖書における富の問題の多様性について

Ben Witherington III, *Jesus and Money. A Guide for Times of Financial Crisis*, Brazos Press, 2010.

Sondra Wheeler

Such a canonical or whole-Bible approach requires that we understand the social as well as the literary context of the given injunctions.（12）

Jewish literature is not simply all in favor of wealth and abundance. And the New Testament is not simply all against having possessions and some prosperity in life. The evidence is more mixed and complex.

Wheeler summarizes what the Old Testament says about wealth and abundance under four headings:

1. Wealth as an occasion for idolatry（Deut.32:10-18; Isa.2:6-8;3:16-24; Jer.5:7; Ezek.7.19-20; 16:15-22: Hos.2:5-9; Amos 6:4-7） The prophets warn about the dangers of wealth leading to idolatry,

2. Wealth as the fruit of injustice（Isa. 3:14-15; 10:1-3; Mic.6:10-12; Jer.5-27-28; Amos 2:6; 4:1-2）

3. Wealth as a sign of Faithfulness（Lev.26:3-10; Deut. 11:13-15; Isa.54:11-12; 60:9-16; Jer.33:6-9）

4. Wealth as the reward for hard labor（Prov.10-21）. In the Wisdom literature, labor and its rewards are often contrasted with Laziness.（13）

What, then, are the basic themes on wealth in the New Testament? Wheeler again lists four:

1. Wealth as a stumbling block（Luke 18:18-30）

2. Wealth as a competing object of devotion. In the Gospels, when a person becomes too attached to possessions, a choice is forced, since one cannot serve both God and Mammon（Matt. 6:24; Luke 16:13）

3. Wealth as a resource for human needs. This is a very persistent theme in the New Testament.（14）

4. Wealth as a symptom of economic injustice.

Sondra Wheeler's discussion is a good reminder of that diversity.

These scholars are as different in their theologies as the liberation theologian Justo González is

to the evangelical Craig Blomberg. What we will discover is that the self-justifying tendency of modern Christians to hoard wealth and live large have absolutely no basis whatsoever in the New Testament. ... It is the prophetic witness about the perils of wealth and the dangers of greed and idolatry that are most frequently carried forward from the Hebrew Scriptures into the New Testament witness about money and wealth.（15）

６.「聖書における富の問題に関して、まず確認すべき点は、聖書には富に対する統一見解など存在しないということである。旧約聖書においては、一方に、富を神からの祝福とする考えがあり――知恵文学には、不正な富の獲得は別にして、富自体を肯定的に捉える言葉が散見される――、他方、預言書や黙示文学では、貧富の格差や不正との関連における富あるいは富者への強烈の批判が見られる。新約聖書においても、旧約聖書の富者批判を受け継いだ議論（福音書、ヤコブ書、ヨハネ黙示録）から、富自体よりも富に固執する欲望へと批判の論点を移す議論（パウロ書簡、牧会書簡）まで、様々な見解が存在する。

見解の多様性を認めた上で、聖書全体に関しては次の点が指摘できる。(1)不正義や過剰な欲望と結びつく富は否定される。(2)富あるいは富者についての論評は、共同体（たとえば教会）が置かれた社会的文脈と相関的である。共同体が社会の経済的政治的な権力構造との関わりを深めるについて、富自体への否定的見解は後退する傾向が見られる。」（「富」『キリスト教平和学事典』教文館、2009 年）

７．Witherington

Why a book on money, and why now? Because our economy is in a free fall. We have worked our way into at least a revession. ... we now have to learn to live with less. ... Maybe now is a good
time --- even a necessary time --- to reconsider what money means to us and how we use it（and are used by it), and especially to look anew at what Jesus and his earliest followers really taught about wealth and possessions.（7）

８．現代の思想的文脈

富の問題は、キリスト教をその現実性に即して問う場合に避けて通ることができない。特に 1990 年代以降の冷戦後の世界において、キリスト教は様々な対立と紛争に関与するものとしてしばしば批判されてきたが、そこには、経済的要因が深く複雑に絡み合っており、こうした議論に対して有意味な論究を行うには、聖書と経済・富との関係を整理することが必要である。

近年、新自由主義的な経済政策の妥当性への疑いが様々な立場から提起されるようになっている。特に問題は、新自由主義的経済と環境危機との関連性である。

（３）経済学再考から環境論へ

９．Sallie McFague, "God's Household: Christianity, Economics, and Planetary Living," in: Paul F. Knitter & Chandra Muzaffar（eds.), *Subverting Greed. Religious Perspectives on the Global Economy*, Orbis Books, 2002.

Abstract

Religions help us from the basic assumptions about what we are and how we should act in the world. Presently, two worldviews with accompanying economic rules for planetary living vie for our loyalty. One is the neoclassical market model with its ideology of greed and its goal of

growth: the consumer society. The other is the ecological economic model with its creed of interdependence and its goal of planetary sustainability: the just society. Many Christians, particularly middle-class North Americans, are presently captive to the first model. Christianity should, however, advocate the second model ---the one that sees the good of all beings, including human beings, as dependent on a sustainable planet where resources are justly distributed. The ecological economic model is not Christian economics; rather, it is an economic model that faintly resembles the radical inclusiveness and open table of Jesus' Kingdom of God. It is better than the market model for human beings and the planet. It is also a more appropriate one for Christians to support. （119）

None of the world's major religions has as its maxim: "Blessed are the greedy." ... Often, however, religion is not considered to be *about* economics.; in fact, many in most societies do not want religion to intrude into economics.

But most religions know better. They know that economics is about human well-being, about who eats and who does not, who has clothes and shelter and who does not, who has the basics for a decent life and who does not. Economics is about life and death , as well as the quality of life. Economics is not just about money, but about sharing scarce
resources among all who need them.（119） Economic is a justice issue, so why would religions not be concerned with it ?

Christian faith embraces the *world* --- all of creation and not just human being ... all of creation, including dying nature as well as oppressed people, are with God's "economy,"God's "household."

oikos: economics, ecology, and ecumenical

we are members of a sciety, now a worldwide one, that accepts, almost without question, an economic theory that supports insatiable greed on the part of individual. This theory lies behind present-day market capitalism（120） and, since the death of communism and the decline of socialism, it is accepted by most ordinary people as a description of the way theings are and must be. Market capitalism is seen as the "trurh."

This realization --- that economis is not a "hard" science, but an ideology with an assumed anthropology and goal for the planet ... --- is the first step in seeing things otherwise.

Christianity and Economics

Is ecological economics "Christian" economics? No, not in any one-on-one or exclusive sense. It is , however, an emerging economic model that is being increasingly set forth andsupported by a wide range of NGOs ... and protest movements.（121）

the restoration of nature must also lie, at least in part, with Christianity. I believe it does,but also with other world religions as well as with education government, economucs, and science. The environmental crisis creates a "planetary agenda," involving all people, all areas of expertise, all religions.（122）

Neoclassical and ecological economics

The two worldviews --- neoclassical economic（s） and ecological economic（s）--- are dramatically different;

Both are models, interpretations of the world and our place in it: neither is a descriptionof fact.（124）

Contemporary neoclassical economics, however, generally deny that economics is about value. But this denial is questionable.

At the base of neoclassical economics is an anthropology: human beings are individual motivated by self-interest.

Neoclassical economics has one value: the monetary fulfillment of individuals provided they compete successfully for the resources.（125）

the view of human nature is individualism and the goal is economic growth.

we turn to the alternative ecological economic paradigm

Ecological economics claims we cannot survive... unless we acknowledge our profound depedence on one another and the earth.

sustainability and distrubutive justice（126）

John Dominic Crossan: "The open commensality and radical egalitarianism of Jesus' kingdom of God are more terrifying than anything we have ever imagined, and even if wecan never accept it, we should not explain it away as something else"（Crossan 1994. 73-74）（130）

10. マクフェイグに対して
・エコロジカルな経済学の内実あるいは詳細は？
・エコロジカルな経済モデルを支える人間理解は、現代の自由主義対共同体主義という論争において共同体主義の立場に立つことになるのか？
・問題のグローバルな性格と多元的な取り組みという構図を描くことは可能か？　どこに多元的な諸立場がコミュニケーション可能になる地平を見出しうるのか？（自然神学？）
・単一の聖書的経済学ではなく、諸経済学の共有する方向性？　バルト的？

11. 経済学にとって人間論はいかなる意義を有するのか。

＜参考文献＞

１．ラスキン『この最後の者にも、ごまとゆり』中公ブックス。
２．伊藤邦武『経済学の哲学　19 世紀経済思想とラスキン』中公新書。
３．トーマス・セドラチェク『善と悪の経済学　ギルガメシュ叙事詩、アニマスピリット、ウォール街占拠』東洋経済新報社。

＜補論１＞環境論的神学と創造論

12. 環境倫理の諸問題と平等の原理　　cf.　生命倫理
　自然の生存権／世代間倫理／地球全体主義
13. リン・ホワイトの問題提起：聖書は人間中心主義か？
　「地の支配」とは？　→　論争：パスモア、モルトマン、リートケ
14. 支配と王権イメージ
　暴君的な専制君主（王は地上における神の代理）、諸部族の調停者（首位の貴族）
15. 人間の固有の使命としての支配、「地の僕」との相捕性　→　人間は何者か？
　エデンの園の管理者・園丁、種の間の利害の調停者
16. 「善悪の知識の木の実」を食べたことがもたらした結果としての地の搾取・破壊
　カインとアベルの対立そして殺人、ノアの洪水
　人間と自然との連帯性（グローバル化の意味）
17. 自然との関係をめぐる近代以前と以後における質的差異

18. 西洋がだめなら東洋、近代がだめなら近代以前、これで問題は解決するか？
アニミズムは世界を救うか？
科学技術と議論がかみ合うかという問題（対話可能性）、環境危機は近代世界の問題である。

19. 自然との共生のための前提
・欲望のコントロール（欲望の無制限の肯定でも、欲望の完全否定でもなく）
理論だけでなく、感性が問われている。
・正義と対話の精神　→　正義の基準自体が「対話」において明らかにされる。
・共に生きる世界のヴィジョンの共有　→　希望の組織化（髙木仁三郎『市民科学者として生きる』岩波新書）

＜創世記１＞27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

＜創世記２＞7 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。
15 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。16 主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。17 ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」
18 主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」
19 主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。

＜創世記９＞9 「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。10 あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。

＜サムエル上　８＞4 イスラエルの長老は全員集まり、ラマのサムエルのもとに来て、5 彼に申し入れた。「あなたは既に年を取られ、息子たちはあなたの道を歩んでいません。今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。」6 裁きを行う王を与えよとの彼らの言い分は、サムエルの目には悪と映った。そこでサムエルは主に祈った。

＜イザヤ１１＞6 狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。7 牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し／獅子も牛もひとしく干し草を食らう。8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる。9 わたしの聖なる山においては／何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように／大地は主を知る知識で満たされる。

＜参考文献＞

１．加藤尚武　　『現代を読み解く倫理学』丸善ライブラリー。
２．富坂キリスト教センター編　『エコロジーとキリスト教』新教出版社。

３．岡本裕一朗　『異議あり！　生命・環境倫理学』ナカニシヤ書店。
４．栗林輝夫編　『現代キリスト教倫理４　世界に生きる』日本基督教団出版局。
５．並木浩一　『旧約聖書における文化と人間』教文館。
６．芦名定道　『自然神学再考　近代世界とキリスト教』晃洋書房。
７．ドネラ・Ｈ・メドウズ他　『限界を超えて』ダイヤモンド社。

＜補論２＞

・聖書の終末論と環境―― B・バーバラ・ロッシング(Barbara R. Rossing)の場合

ロッシング

「新しいエルサレムにおける生命の川：地上の未来に対する環境論的ヴィジョン」

１．ロッシング：シカゴのルター派神学校の新約学の教授、ヨハネ黙示論解釈の専門家。
The Rapture Exposed. The Mesaage of Hope in the Book of Revelation, Basic Books, 2004.

２．ロッシングの問題意識は、黙示録を非環境論的であると解釈する（黙示録への懐疑論）のとは別の解釈の可能性、むしろ、ヨハネ黙示録を環境論者でフェミニストの新約聖書学者として積極的に読解することを目指している。「黙示録の目的は人々に強く勧め勇気を与え、神の審判と救済を宣言し、希望と正義のヴィジョンをもたらすことなのである。」(207)

３．そのためにロッシングが注目するのは、黙示録が提示する、バビロンとエルサレムという対照的な二つの都市のヴィジョン、二つの対照的な政治経済学のヴィジョンである。小アジアの「都市のキリスト教徒」(urban Christian)宛という文脈がこの議論に関連している。また、ロッシングは、ディーター・ゲオロギ(Dieter Georgi)の研究に依拠している。

・ローマ帝国の「現実化した終末論」（永遠のローマ、ローマの平和）。
ローマ帝国のグローバルな全能性は地中海の海洋交易が支えていた。黙示録は、このローマの全能と永遠性を転倒している。

・都市の女性的形姿（人格化）による描写。「その主要な論争は、政治的で経済的であり、性差に関わるものではない。」(209)

・バビロンの政治経済学、バビロンの環境破壊。
「バビロンの売春の対する黙示録の批判は、性的ではなく、ローマの搾取的な貿易と経済支配に対して隠喩的に向けられている。」(209)
「奴隷制と奴隷交易に対するもっとも明確な批判」

・森林伐採、「裸の荒れ地」(17:16) エレモオー、ギュムネーン
68-70 年のユダヤ戦争についてのヨセフスの証言。ローマは征服された土地を森林伐採した。グローバルな森林伐採。帝国主義と不正義への批判。

・バビロンに対する新しいエルサレム、「もはや海はない」(21:1)
「神話論的な恐れ」（キャサリン・ケラー）は、黙示録にとって、海の主要な批判ではない。「黙示録は海を政治的に描いている」、「悪の場所」「交易船が航海する場所」
「もはや海はない」＝「ローマの貨物船と交易の終わり」

別の経済的ヴィジョン

・新しいエルサレム：生命の都
新しいエルサレムは環境論的。
「テキストがわれわれに呼び起こすのは、都市的で環境的な危機、グローバルな市場経済の危機のただ中における神への信頼である。」(214)

・地上における神の家、都市生活のヴィジョン。スケネ
地上からの脱出（携挙）ではなく、新しいエルサレムは「降りてくる」。都市的ミニ

ストリの新しいヴィジョン
・贈与的経済（a gift economy）
　生命の水をすべての人に値なく飲ませる。われわれがエコシステムに対してダメージを与えることへの預言者的な批判
・エゼキエルの新しい神殿のヴィションの拡張。
・諸民族の癒やし。創世記 3:22 の禁止命令を克服する生命の木のヴィジョン。
　都市と田舎の和解
・新しいエルサレムは未来のためのヴィジョンである。
　「わたしたちは、よりよい近隣、聖なる都を描きながら希望を持ち続けねばならない。」（219）

＜問題＞
１．メタファー・モデル、ヴィジョンへの注目　→　構想力と人間存在
２．個と共同体とをつなぐ理論はいかにして可能か？　社会的構想力、ヴィジョンの共有とは？
３．テキストの読解に即して。聖書読解の新しい形。

＜参考文献＞
１．山本良一、高岡美佳編、SPEED 研究会監修
『地球温暖化への３つの選択――低炭素化・適応・気候改変のどれを選ぶか』
生産性出版、2011 年。
２．池谷和信編『地球環境史からの問い――ヒトと自然の共生とは何か』
岩波書店、2009 年。
３．John B. Cobb Jr., *Postmodernism and Public Policy. Reframing Religion, Culture, Education, Sexuality, Class, Race, and the Economy*, State University Press of New York Press, 2002.
４．Barrara R. Rossing, “River of Life in God's New Jerusalem: An Ecological Vision for Earth's Future”, in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether（eds.）, *Christianity and Ecology*, Harvard University Press, 2000, pp.205-224.